文学・言語学　歴史・文化　民俗学・神道

伊勢・熊野の信仰と和歌

研究キーワード

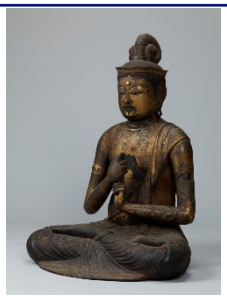
- 地域観光
- 日本中世文学
- 仏教学

連携アピール

- 私の専門とする中世和歌において、和歌と仏教がタイアップして、「歌道」が作り上げられてゆく中で、伊勢や熊野は聖地となりました。平安時代から和歌は「百首歌」という形式で神仏へ祈願を届ける手段となっていましたが、中世和歌は祈りの言葉としての和歌を、宗教の信仰と同等の地平にまで高めました。そして、伊勢や熊野へのはるかな道程の苦しさを乗り越え、自然の風景に心を澄ます修行が西行の和歌の原形質であり、この文学と仏教の垣根を越えた融合は、芭蕉の『奥の細道』にも繋がっていったのです。

本研究の概要

- 本研究の概要は、中世の伊勢や熊野の神仏習合の信仰形態が、いかに中世和歌の本質につながる「原形質」となっていったかを解明するため、中世和歌の源流をなす西行、そしてその影響を受けて伊勢や熊野を信仰した中世の歌人たちについて悉皆的な調査を行うというものである。中世和歌はその本質において、近代的な自己とは相反する没個性的な類型性を抜きがたく抱え込んでいる。宗教信仰も、個々人のばらばらな思いを一つの共同性のうちに包摂するが、中世和歌もまたそれに類する「本の思想」を重んじ、本歌取りや、本意（もとの心）、歌の本体（＝『古今集』）、本地といった概念を追究していった。中世の国土観における伊勢や熊野は、超越的存在としての神仏が垂迹する「本」（もと）の地であったのではないか、という見通しのもと、歌道仏道一如観の研究を日本中世史、仏教学、地理学とも連携しつつ行ってゆく。



研究者

木村　尚志（きむら　たかし）
文学部国文学科　准教授